

御室と仁和寺教学圏

大正大学 堀内規之

京都・洛西に、真言宗御室派の総本山であり、さらにまた世界遺産に指定されている仁和寺がある。その創建は平安時代に遡り、光孝天皇（830～887）の発願によって大内山の麓に御願寺が着工されるも、光孝天皇自身が崩御。その意志を継ぎ、仁和四年（888）に完成させたのが宇多天皇（867～931）であり、落慶法要は弘法大師の甥にして、東寺長者であった中院僧正真然（804～891）が導師を勤めている。

その後宇多天皇は、寛平九年（897）に譲位、出家し寛平と名を改め、後に仁和寺境内に僧房（尊称して御室）を造営して住されている。すなわち、仁和寺第一世門跡となられたのである。これ以降、皇室出身者が代々門跡を務め、真言密教において重要な地位を占めるだけでなく、鎌倉時代までには門跡寺院として最高の格式を有した寺院であった。また当初、仁和寺別当に任ぜられたのが天台宗の幽仙であったが、宇多天皇の出家の戒師を勤めた本覚大師益信（827～906）の功績もあって、般若寺僧正観賢（853～925）が別当に就任して以来、完全に真言密教の寺院として発展していた。

この仁和寺において、寛平法皇のあとを、三条天皇の皇子である大御室性信親王（1005～1085）、白河天皇の皇子である中御室覚行法親王（1075～1105）、同じく白河法皇の皇子である高野御室覚法法親王（1091～1153）、鳥羽天皇の皇子である紫金台寺御室覚性法親王（1129～1169）、そして後白河天皇の皇子である北院御室守覚法親王（1150～1202）と歴代の天皇につながる人物が、仁和寺御室として仁和寺教団を統括していた。このような御室（門跡）に関する一般的な印象・認識は、仁和寺の象徴的存在で、実際面の多くを別当以下の僧がおこなっていたかのように思われがちである。しかしながら、その実態は大きく異なり、代々の御室（＝門跡）自らが修法を行い、さらには教学振興を図っていた事実を挙げることができる。本発表では、歴代の御室（門跡）がどのように真言密教の教学振興に関わってきたのか、またその様な御室を頂点に戴く仁和寺に関わりのある学僧たちがどの様な関係性を有して、互に情報交換をしていながら、仁和寺教学圏とも表現できうるネットワークを形成していったかを探ってみたい。そのため、特に院政期における御室である性信親王から守覚法親王に至るまでの歴代の御室と、その御室を支えた仁和寺僧である寛助をはじめとする仁和寺に関わりのある学匠の事績を取り上げて、院政期における真言密教のあり方、さらには院政期における日本仏教の一側面を明らかに出来得ればと考えている。

【キーワード】 真言密教・仁和寺・御室